

# 鹿児島県内出土の土馬について

竹 森 友 子

## はじめに

古墳から出土する馬形埴輪とは異なる、大きさ10cmから20cmの小形かつ粗造の馬形の土製品は、一般的に土馬どばと呼称され、存続期間は古墳時代末期から平安時代頃と考えられている。各地の土馬資料を集成し、土馬を体系的に考察されたのが大場磐雄氏である<sup>①</sup>。その後の前田豊邦氏<sup>②</sup>、小田富士雄氏<sup>③</sup>、金子裕之氏<sup>④</sup>などの研究をはじめ、地域の出土例に関する論考を含めると、多くの研究が存在している。

大場氏は土馬の種類を、その焼成によって狭義の土製（土師質）と陶質（須恵質）の2種類に分け、形状の分類として飾馬（鞍や鐙など馬具を装着した状態を示す）と裸馬の2形式を示した。また、土馬を用いた祭祀については水霊祭祀、祈雨祭祀、峠神祭祀、墓前祭祀などに分類された。大和や河内を中心とした畿内における土馬の形式変遷や、それらの年代に関する研究<sup>⑤</sup>などにより、大場説の一部（古墳出土例を根拠とした墓前祭祀説）は再検討を迫られているが、その他については現在でも土馬研究の基本となっている。

本稿では、鹿児島県内から出土した土馬を紹介す

るとともに、鹿児島県内の古代祭祀の一端を明らかにできればと思っている。なお、土馬については論考や発掘調査報告書を見ると、馬形土製品や土製馬形代などの呼称もあるが、土馬で統一する。また、土馬として報告されているものには、中世や近世の出土例も存在するが、古代の土馬のみを考察の対象とする。

## 1 鹿児島県内出土の土馬について

### （1）土馬出土遺跡の概要

現在の伊佐市菱刈地域から発見された土馬・人形ひとがたについて考察された新東晃一氏の論文や奈良文化財研究所の全国遺跡報告書総覧、鹿児島県立埋蔵文化財センターの埋蔵文化財情報データベース等を参考にすると、鹿児島県内で古代の土馬が出土した遺跡は7つ存在する（表1参照）。まずは、表1の順にそれぞれの遺跡の概要をみていきたい<sup>⑥</sup>。

塞ノ神遺跡は伊佐市菱刈下市山に所在する。明治時代中頃、開墾中に須恵器壺に埋納された人形・土馬が多数発見されたが、出土状況は不明であるという。また、資料の一部は東京大学に寄贈され、残りが大口小学校で保管されていたが、現在は行方不明になっている。

岡野遺跡は伊佐市菱刈田中に所在する。盆地の外

表1 鹿児島県内の土馬出土遺跡

遺跡名	所在地	主な出土遺物	年代	備考	出典
1 塞ノ神	伊佐市菱刈下市山	土馬・人形・須恵器壺		須恵器壺内に人形・土馬が埋納	註(6)文献
2 岡野	伊佐市菱刈田中	土馬・人形・土版・土師器甕形壺	9世紀	壺に人形・土馬・土版が埋納	同上
3 津栗野	伊佐市菱刈田中	土馬・人形・須恵器壺（蔵骨器転用）	8世紀後半カ	土馬が壺に埋納	同上
4 向井原	薩摩郡さつま町中津川	土馬・土師器・須恵器・青磁・滑石製品	古墳時代以降		註(7)文献
5 小瀬戸	始良市西餅田小瀬戸	土馬・土師器・須恵器・青磁・白磁・墨書・刻書土器	奈良末～平安時代	官衙的要素あり	註(8)文献
6 宮田ヶ岡瓦窯跡	始良市船津	（瓦以外）土馬・土師器・須恵器・陶磁器	奈良～平安時代	大隅国分寺に瓦供給	註(9)文献
7 干迫	始良市加治木町日木山	土馬・墨書土器・土師器・須恵器・白磁・青磁	平安時代	官道に関する役所の可能性	註(10)文献

輪山から延びた黒園山の丘陵末尾の東南傾斜面に立地している。昭和 39 (1964) 年に同町在住の田子山静氏が開墾中に発見し、採集されたものである。なお、遺跡の北側には 8 世紀末～9 世紀初頭頃に須恵器を生産した岡野古窯跡が存在している。

津栗野遺跡は伊佐市菱刈田中に所在する。盆地の外輪山から延びた低丘陵末端上に位置し、南方は田中地区の平野部にある。

向井原遺跡は薩摩郡さつま町中津川北方に所在する。縄文・古墳時代、古代・中世・近世の遺物散布地、古墳時代の集落跡である。標高約 160～170m の祁答院丘陵の火山灰台地の北側縁辺部に立地している。近世に入ると遺跡の南側には、永野・山ヶ野金山の採掘を支える金山街道が整備された<sup>7)</sup>。

小瀬戸遺跡は始良市始良町小瀬戸に所在する。奈良時代末から平安時代にかけての掘立柱建物跡や井戸跡、緑釉陶器、墨書土器などが出土し、地方官衙の可能性が考えられている遺跡である。遺跡は、別府川と思川によって形成された沖積平野の基部、建昌城の裾に位置する。標高約 11m の微高地で北方約 1 km の位置には宮田ヶ岡瓦窯跡が所在している<sup>8)</sup>。

宮田ヶ岡瓦窯跡は始良市始良町船津に所在する。奈良～平安時代の大隅国分寺に瓦を供給した瓦窯跡である。別府川河口から約 5 km 上流にあり、別府川右岸の建昌城や萩峯城といった、中世の山城が築かれた台地から派生した標高 15～18m の小丘陵上に立地している<sup>9)</sup>。

干迫遺跡は、始良市加治木町日木山に所在する。縄文時代～近世の集落遺跡で、古代においては官道と考えられている道路状遺構や、蒲生駅と大隅国府の途上にある役所と考えられている掘立柱建物跡などが検出されている。遺跡は鹿児島湾を前面に望む盆地の北東隅近くにあり、標高 10～15m の微高地にある。西側には日木山川が流れている。古代の出土品のなかには、越窯青磁・荊窯白磁・墨書土器・土馬などが含まれていたというが、台風によって失われ詳細は不明である<sup>10)</sup>。

## (2) 土馬の検出状況と形態について<sup>11)</sup>

出土資料が不明な塞ノ神遺跡と干迫遺跡を除く遺跡の出土土馬について見ていきたい。

岡野遺跡の土馬の出土状況は、径約 60cm の円形の石囲いが築かれ、その中央に土馬など土製品の入った土師器甔形壺が置かれ、壺の外側(石囲いの内側)には木炭が多量に入っていたという。土師器甔形壺は生活具としての使用痕跡がなく、口縁部を打

ち欠き、丸底の部分に焼成前になる 6 個の穿孔があることから、蔵骨器であったとの指摘もある<sup>12)</sup>。

蔵骨器とともに人形(8体)、土馬(4体)が発見された例としては、熊本市の例(旧養蚕試験場の桑畑、現熊本県庁)があるが、手掛かりが昭和 13 (1938) 年の新聞記事だけで、詳細は不明である<sup>13)</sup>。また、石囲や炭化物を伴う例としては、北陸に報告例がある<sup>14)</sup>。①藤津遺跡(新潟県佐渡市)の楕円形の石囲(長径 2 m・短径 1 m)を伴う炭化層の中から土馬が出土した例、②石囲ではないが礫を伴う例として、径 1 m の焼土の中心部に木炭・焼土の堆積があり、その焼土面上部の黒色土層中から土馬が出土、土馬から 10cm 離れた焼土面上の礫の下部から足部が発見された、茶臼山祭祀遺跡(石川県小松市)の例、③土馬と関係すると考えられる方形井戸状遺構(130cm×130cm×深さ 60cm)から多量の炭化物が出土した外遺跡(石川県鹿島郡)の例である。

なお岡野遺跡の、土馬以外の出土品としては、土師質で両手を前にあげた乗馬の姿勢を示す、高さ 10cm 内外の人形(発見時 10 もしくは 9 体、現存足部のみのもを含め 9 体)、土師質で茶褐色を呈する



写真 1 岡野遺跡出土の土馬と人形  
(伊佐市教育委員会所蔵)

円形の土版（発見時10個、現存9個）がある。

土馬は土師質で赤褐色を呈する裸馬（発見時10体、現存足部のみのものも含め7体）である。写真1の1の土馬は長さ10cm、高さ7cmを測る。顔には目と鼻はすべてにあるが、口は描かれるものと描かれないものがあり、尾は上を向くものと下を向くものがある。製作年代は甗の形態から奈良時代頃と推定されている。なお、土馬と人形はそれぞれの組み合わせが確認されているため、乗馬を意図したセットであると考えられている<sup>45)</sup>。

津栗野遺跡は昭和27（1952）年に新原岫太郎氏によって、口縁部の一部と底部高台を欠く須恵器壺に入った人形・土馬が発見された。資料は岡野遺跡の出土品と混在してしまっているが、松崎正治（郷土史家）の考古記録帳に記録が有る土馬2例に関しては判明している。発掘調査がなされたわけではないため、出土状況はわかっていない。



写真2 津栗野遺跡出土の土馬  
（伊佐市教育委員会蔵）

土馬は土師質の裸馬で、岡野遺跡のものによく似ているが、色調が黄橙色系である。写真2の右側の土馬は全長約8cmを測る。須恵器の器形から奈良時代のもので推定されている。

向井原遺跡の土馬は、古墳時代の住居跡1号検出時にかなり上層から出土した。この遺跡唯一の古代資料である。赤褐色の土師質の土馬で、頸から上の頭部（長さ2.7cm）のみの資料で、耳・目・鼻・口が表現されている。顔は岡野資料の写真1の4に似る。

小瀬戸遺跡の土馬は、遺跡東端の区のピット中の埋土中に出土した。径38cm、深さ43cmを測る遺跡



写真3 小瀬戸遺跡出土の土馬  
（鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵）

内では大きいピットで、ピットの東西約1mには南北に溝状遺構が平行に走る。土馬は黒色を呈し、頸部の一部及び頭部、尻尾部は欠落する。焼成後の欠落である。姿は体躯が短く、頭部が大きい。四肢は短く不安定な形である。残存長は6.4cmで、四足には下方から1.5cm～1.0cm、径0.1cm、中軀には腹より背にかけて径0.1cmの孔がある。孔は焼成用の空気抜きと考えられている。遺跡が奈良時代末から平安時代の遺跡と考えられているので、土馬も当該期のものであろう。

宮田ヶ岡瓦窯跡からは3基の瓦窯が検出されているが、土馬は第2号窯跡の覆土除去中に出土した。土師質の中型装鞍土馬である。頸部の途中から欠落して頭部はなく、尻尾も一部欠落している。足部の表現はない。鞍部には、鞍を表現した別の薄い粘土が貼り付けてあったと思われるが、今は欠落して両端にのみ残っている。全長は7.5cm、残存高は3.6cmである。遺跡が奈良時代から平安時代にかけての遺跡と考えられているので、土馬も当該期のものであろう。



写真4 宮田ヶ岡瓦窯跡出土の土馬  
（始良市教育委員会蔵）

## 2 土馬出土遺跡と古代官道

大宝律令により、全国は五畿七道（東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）に区分され、京と地方は計画道路である駅路で結ばれ、駅路は律令国家にとっての重要性によって大路・中路・小路に区分された。地方には、国一郡一里の三段階の行政組織が設定されたが、駅路は国府間を結び、伝路は郡家間を結んだ。

九州の古代官道・駅路である西海道は大宰府を起点とする。大宰府から筑後国・肥後国を経て薩摩国・大隅国を結ぶ、いわゆる西海道西路の薩摩国内の駅は、『延喜式』の記載によると市来駅、英祢駅、網津駅、田後駅（『日本後紀』では薩摩郡田尻駅）、櫛野駅、高来駅があり、大隅国内には蒲生駅がある。大宰府から豊後国・日向国を経て大隅国を結ぶ、いわゆる西海道東路は、日向国の嶋津駅から西海道西路の大隅国府

と結ぶ。そして、薩摩・大隅両国府を経由しないルートとして肥後・日向連絡路があり、そのルート上に大水駅が存在した。その大水駅の比定地として伊佐市菱刈前目が考えられている<sup>(6)</sup>。また、大隅国府から薩摩国府を通らずに大水駅を経由して肥後に出る直結路が存在した可能性が示されているが、その直結路は大隅国府から宮坂を経て十三塚原の台地を北上し、横川から栗野、菱刈を経て大口から肥後国の仁王駅へというルートが想定されている<sup>(7)</sup>。その際、旧菱刈町内では、旧栗野町から川内川に沿って、湯之尾を経て、築地から前目を通り、重留・大口へ通じるという<sup>(8)</sup>。

塞ノ神遺跡・岡野遺跡・津栗野遺跡が存在する伊佐市菱刈下市山や伊佐市菱刈田中は重留と近く、古代官道の近くということになる。

向井原遺跡に関して、近世に入ると遺跡の南側に、永野・山ヶ野金山の採掘を支える金山街道が整備されたことは前述したが、康治元（1142）年「大前道助議状案」に先祖重代相伝の地である中津川名を孫子の師道に譲る旨が書かれており、遺跡が所在する薩摩郡さつま町中津川は、平安時代には開発が進んでいたことが確かめられる。西海道一円に広く分布し、その多くは古代路に関係する地名である「大人（形）」地名が山ヶ野の近くに存在しており<sup>(9)</sup>、官道ではない古代路が存在していた可能性がある。

小瀬戸遺跡は推定駅路から南へ約700m、宮田ヶ岡瓦窯跡は南へ約1.7kmの位置にあり<sup>(10)</sup>、古代駅路と近い。干迫遺跡は、前述したが古代官道と考えられている道路状遺構が検出されている。

このように、鹿児島県内の土馬出土遺跡は古代官道との関係が推定できる。土馬と古代官道との関係については、北陸で9例（うち2例が前述した②茶臼山祭祀遺跡と③外遺跡）<sup>(11)</sup>、静岡県で10例の報告がある<sup>(12)</sup>。全国の土馬出土例を調べてはいないが、村上吉郎氏が1982年に北陸道の土馬出土遺跡を集成し、25例中9例に古代官道との関係が認められている。また、加藤夏姫氏が2009年に静岡県内の土馬出土遺跡を集成し、32例中10例に古代官道との関係が認められていることから、土馬の祭祀のひとつに道（官道）をめぐる祭祀を認めてよいであろう。

### 3 土馬を用いた祭祀の性格—官道との関係が認められる遺跡について—

#### （1）従來說について

新東晃一氏は塞ノ神・岡野・津栗野遺跡の土馬祭

祀について、遺跡の立地から荒神祭祀を考えられた。その際参考とされたのが、『肥前国風土記』の佐嘉郡条である。内容は、佐嘉川の川上に荒神がおり、通行人の半数を殺害していた。そこで、県主の祖が占ったところ、土蜘蛛の女二人が、下田村の土を取って、人形・馬形を作り、この神を祀れば荒神は静かになると言った、というもので、交通阻害をする荒ぶる神への対応に関する話である。

2で、土馬と古代官道との関係が推定できる例として北陸や静岡の例を紹介したが、北陸や浜松市西畑屋遺跡については、『肥前国風土記』の佐嘉郡条を参考として、当該遺跡の土馬を用いた祭祀を荒神祭祀と理解している（但し西畑屋遺跡例については、大祓のような祭祀の地方版で、罪やけがれを移した人形（悪霊）を土馬に乗せ、他界へ送り出した祭祀であるという解釈も示されている）。

目的をもって往来する中で、交通や往来を阻害する山・河川・峠・坂などがそこを通過する人々に恐怖感や苦難を与えたことは想像に難くなく、交通路における交通を阻害する神に対する祭祀は十分に考えられる。

#### （2）道の両義性

鬼塚久美子氏は、「村と外界は、通行可能な道によって結ばれたことから、村の外に広がる実在存在としての外界は、村の中に住む人たちの意識の上で、一筋の道の先に凝縮して観念される」<sup>(13)</sup>と高取正男氏の説を引用し、交通路自体が本質的に持つ両義性に注目されている。つまり、交通路はある地点と他の地点を結び付けるが、他方で交通路を境としてある一定の空間を分断する機能を持つからである。道に関連する峠、坂、辻、渡など象徴的機能を与えられている場所で、外から村に入り来る災害を防止し、あるいは村内に発生した災害を外へ追い出そうとする信仰や精霊迎えなどが行われるとする<sup>(14)</sup>。

地方の実態に即した行政単位である郡をいくつか束ねて人為的に設定された広域行政単位が国で、その役所である国府と国府を結ぶのが駅路である。古代の人々にとっては、集落と未知の他国を結ぶ存在であるとともに、集落を分断する存在でもあったのではないか。駅路や官道の周辺で、外から集落に入り来る災害を防止する祭祀、あるいは集落に発生した災害を外へ追い出そうとする祭祀が行われた可能性は高い。

『古事記』孝靈天皇段には、播磨の氷河の岬に忌瓮を据えて神を祭り、播磨を道の入口として吉備の

国を平定したとあるが、それは神酒を入れた瓶を置いて土地の神を和める祭祀が行われたと解釈されている<sup>(5)</sup>。また、『播磨国風土記』託賀郡条には、丹波と播磨が国の堺を定めたとき、土に大甕を埋めて国境の印としたという伝承があり、国境に神酒を醸する甕を埋め、神を祭ったと解釈されている<sup>(6)</sup>。

古代において、駅路によって結ばれる他国の境には、土地の神が存在していると認識されていたことがわかる。駅路や官道の周辺では、外来者による土地の神を和ませる祭祀が行われていたであろうことも想定できる。

古代官道との関係が推定できる土馬祭祀については、交通阻害を行う荒神を祭る荒神祭祀のほかにも、本節で述べたように外から集落に入り来る災害を防止する祭祀、あるいは集落に発生した災疫を外へ追い出そうとする祭祀や、土地の神に対する祭祀などが行われた可能性も考えることができよう。

## おわりに

本稿では、鹿児島県内の土馬出土遺跡が古代官道との関係が推定できることや、その祭祀は交通阻害を行う荒神を祭る荒神祭祀のほかにも、外から集落に入り来る災害を防止する祭祀、あるいは集落に発生した災疫を外へ追い出そうとする祭祀や、土地の神に対する祭祀などが行われた可能性も考えられるということを述べた。

しかし、鹿児島県内の土馬出土遺跡で行われたであろう祭祀の内容を明らかにすることはできなかった。また、官道との関係が推定できることは共通しても、菱刈出土の土馬と始良市出土の土馬は足部など形態が大きく異なっており、それが何を意味するのかまで考察が及ばなかった。これらの点に関しては、今後の課題として擱筆したい。

## 註

- (1) 大場磐雄「上代馬形遺物に就いて」(『考古学雑誌』第27巻4号, 1937年)・「上代馬形遺物再考」(『國學院雑誌』第67巻1号, 1966年)
- (2) 前田豊邦「土製馬に関する試論」(『古代学研究』第53号, 1970年)
- (3) 小田富士雄「古代形代馬考」(『史淵』第105・106合輯, 1971年)
- (4) 金子裕之「平城京と祭場」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集, 1985年)

- (5) 小笠原好彦「土馬考」(『物質文化』25, 1975年)
- (6) 塞ノ神遺跡・岡野遺跡・津栗野遺跡に関しては、a 新東晃一「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」(『古代文化』30巻2号, 1978年)・「古墳時代」(大口市郷土誌編さん委員会『大口市郷土誌』上巻, 大口市, 1981年), b 新里貴之「古代～中世の菱刈」(菱刈町郷土誌編纂委員会『菱刈町郷土誌 改訂版』菱刈町, 2007年)を参考にしている。
- (7) 『さつま町発掘調査報告書(8) 猿後遺跡・向井原遺跡』(さつま町教育委員会, 2016年)
- (8) 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(19) 小瀬戸遺跡・建馬場遺跡・松木田遺跡』(鹿児島県教育委員会, 1982年)
- (9) 『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集 宮田ヶ岡瓦窯跡』(始良町教育委員会, 1999年)
- (10) 『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22) 干迫遺跡』(鹿児島県立埋蔵文化財センター, 1997年)
- (11) 各遺跡の土馬の出土状況や形態に関しては前掲註6～9を参考にしている。
- (12) 前掲註6a
- (13) 『熊本市の文化財 第108集 二本木遺跡群32』(熊本市教育委員会, 2022年)
- (14) 村上吉郎「土馬祭祀と漢神信仰—北陸道出土の土馬から—」(『石川考古学研究会々誌』25号, 1982年)
- (15) 前掲註6a
- (16) 武部健一「西海道をたどる」『完全踏査 続古代の道—山陰道・山陽道・南海道・西海道—』吉川弘文館, 2005年)
- (17) 武久義彦「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」(『奈良女子大学文学部研究年報』第38号, 1994年)
- (18) 上村俊洋「大隅国成立と菱刈郡設置」(註6b文献に同じ)
- (19) 上村俊洋氏のご教示による。
- (20) 『始良市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 柳ヶ迫遺跡』(始良市教育委員会, 2011年)の第3図による。
- (21) 前掲註14に同じ。
- (22) a 加藤夏姫「土馬を中心とした古代祭祀の多様性の研究—静岡県を中心として—」(『國學院大學考古資料館紀要』第25輯, 2009年), b 鈴木敏則「土馬と土器祭祀—浜松市西畑屋遺跡の

- 例から一」(『季刊 考古学』第87号, 2004年)
- (23) 高取正男「宗教と社会—信仰の日本の特性—」  
(『高取正男著作集1 宗教民俗学』法蔵館,  
1982年)
- (24) 鬼塚久美子「古代の宮都・国府における祭祀  
の場—境界性との関連について—」(『人文地理』  
第47巻 第1号, 1995年)
- (25) 孝霊天皇段頭注 (『新編日本古典文学全集 1  
古事記』小学館, 1997年)
- (26) 播磨国風土記託賀郡条頭注 (『新編日本古典文  
学全集 5 風土記』小学館, 1997年)

小稿を執筆するにあたり、鹿児島県立埋蔵文化財センター、始良市教育委員会・始良市歴史民俗資料館、伊佐市教育委員会・菱刈郷土資料館には資料調査をさせていただき、大変お世話になった。また、本館主任学芸専門員の上村俊洋氏には鹿児島県内の古代交通路に関してご教授いただいた。末筆ながら、感謝申し上げたい。

(たけもり ともこ 本館学芸課資料調査編集員)